

平成25年8月24日

江戸中期の京町家と生活

京町家情報センター

松井 薫

A.江戸中期の日本

人口3500万人（京都40万人、大坂20万人、江戸140万人）
士農工商の身分制度の世の中（武士6～7%、農80%、工商10%）
太陽エネルギーのみでの生活。用事があれば相手方まで歩いていく。

B.江戸中期の京都

市街地：鞍馬口通～七条通、鴨川～千本通あたりの範囲

御所があり、その周りに公家が住んでいて 警護の武士もいた。

そのほかの市街地は工商の人たち、寺院等がほとんど。市街地の周辺には農家。

1 武士の家の変化

北入りの家が出来てくる。中国儒教の思想が薄れ、日本独自の仏教思想が浸透してくる。

→玄関土間の確立。茶の間、居間が出来る。接客空間と私的空間の分離。

2 公家の家

禄高の割には大きい敷地と家を与えられていた。

3 庶民の家（町家）

柱は掘っ立てから一つ石基礎（慶長伏見の震災以後）

屋根は板葺から瓦葺へ（天明の大火以後）

一列三室型（ミセ ダイドコ ザシキ）ザシキに仏壇（キリシタン禁制）

家の新築は数年がかり。ご飯を炊くのも自分の能力と五感に頼る。

※慶長伏見の震災（1596年閏7月13日深夜0時ごろ伏見付近を震源とする M7 クラスの直下型地震。伏見城天守倒壊。死者4万5千人）

※天明の大火（1788年1月30日未明、団栗辻子付近から出火。つけ火か。鴨川を越えて燃え広がり 市街地のほとんどを焼き尽くす。焼失1967町の内1424町。

西本願寺まえのイチョウの木が、水を噴いて大切な御影堂などが焼失するのを防いだ、といわれる。）

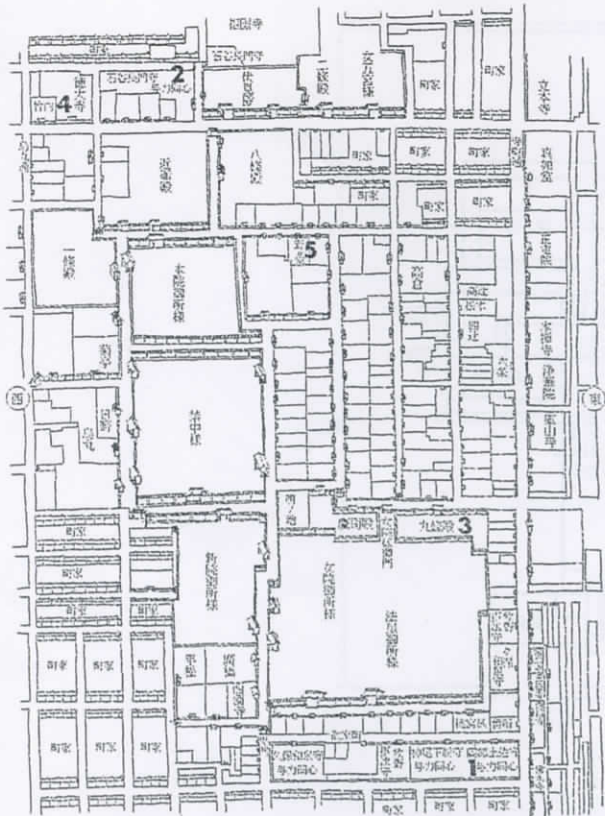
4 町内の生活

両側町の形成

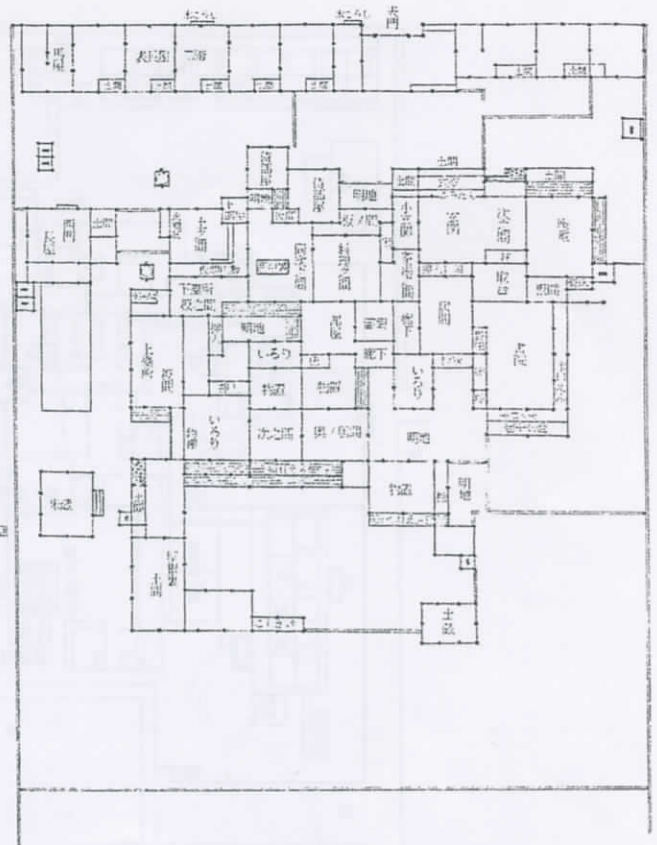
町内の構成（30年で交代、借家人は4年で替わる）

町式目

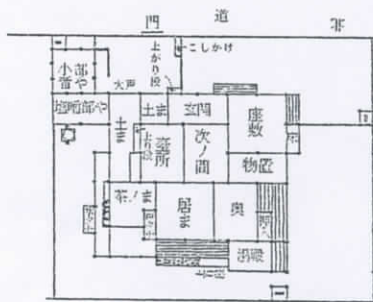
子供は10年の預かり物。武士の家でも子供の個室なんてない。



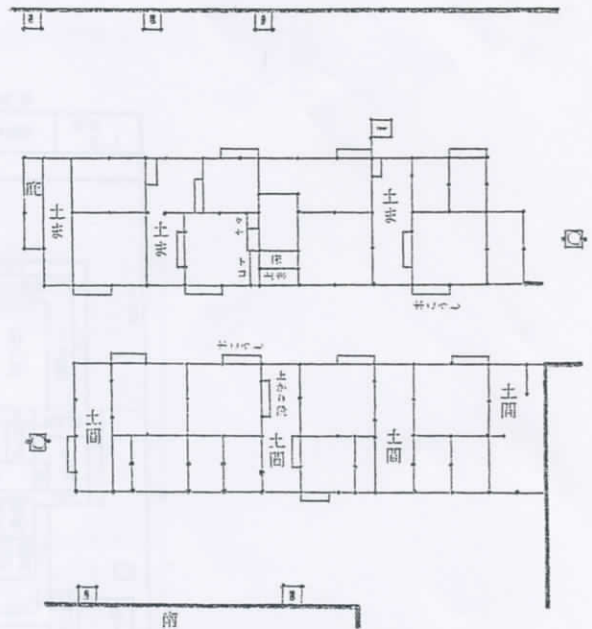
京都公家町(新改内裏之図、1677)



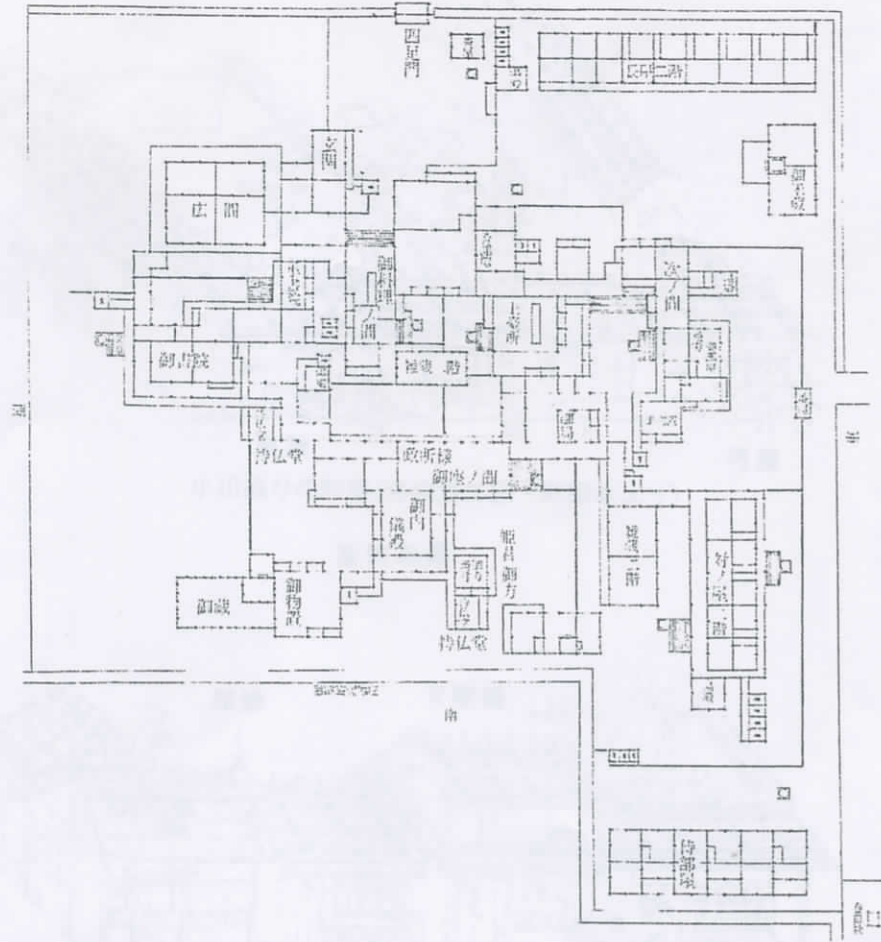
武士の家 1 岡部土佐守の家(北入り 181.1坪)



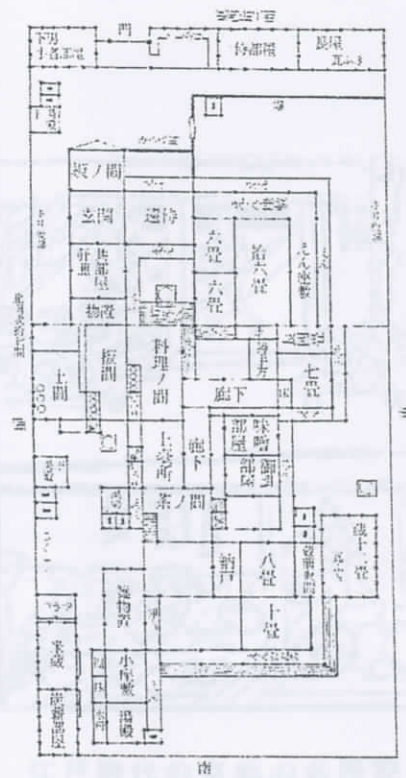
武士の家 2 与力の家(北入り 26.4坪)



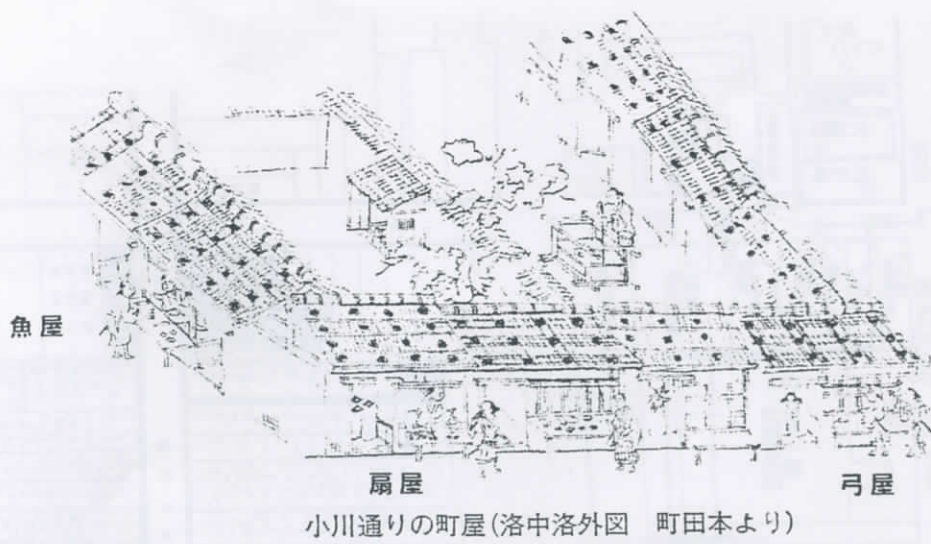
同心長屋(北入り 南入り)



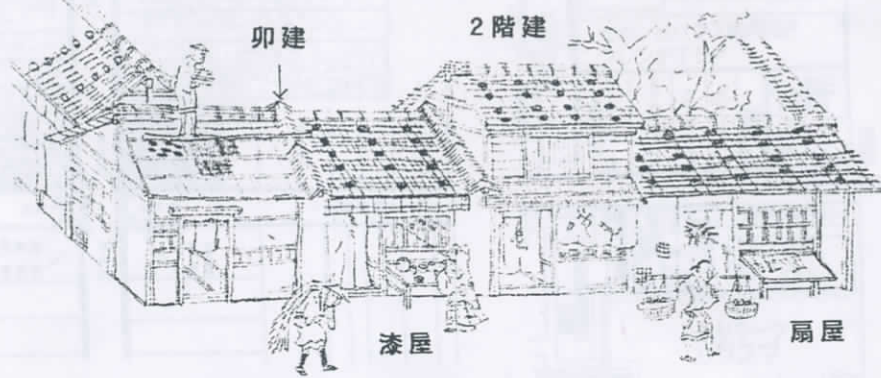
公家の家 3 九条殿(北入り 600.5坪)



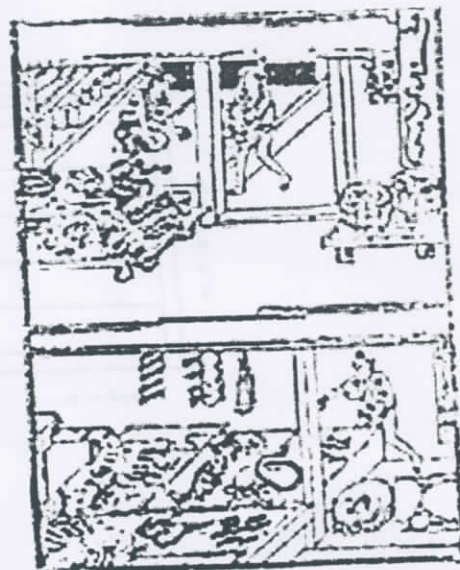
公家の家 5 野之宮殿(北入り 196.8坪)



室町末期

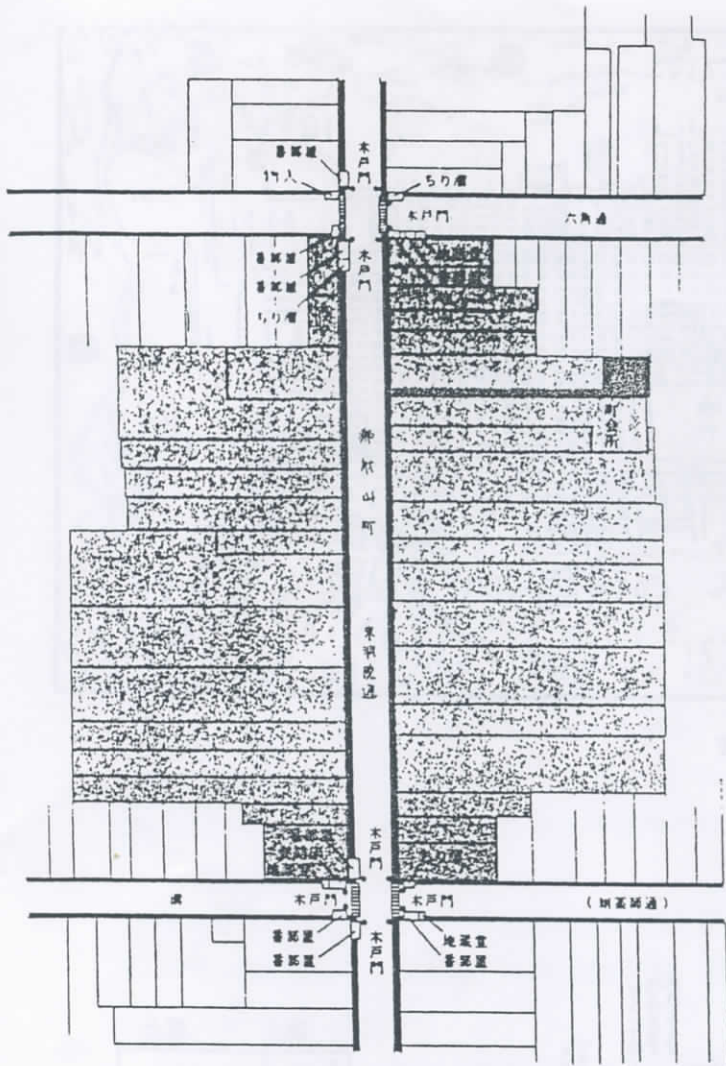


室町通りの町屋(洛中洛外図 町田本より)

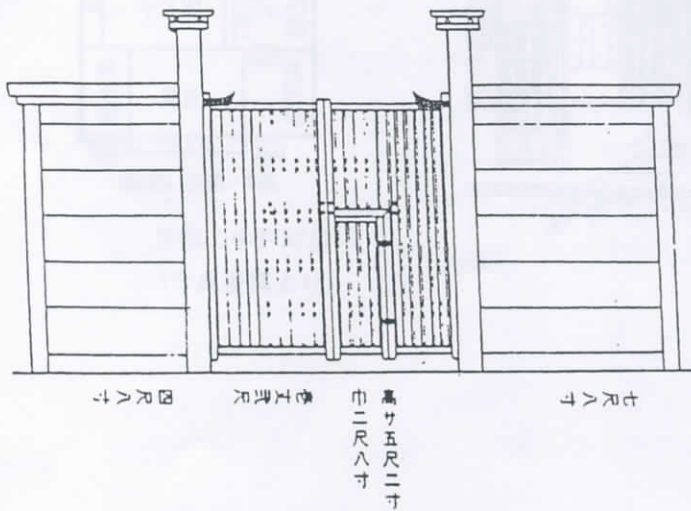
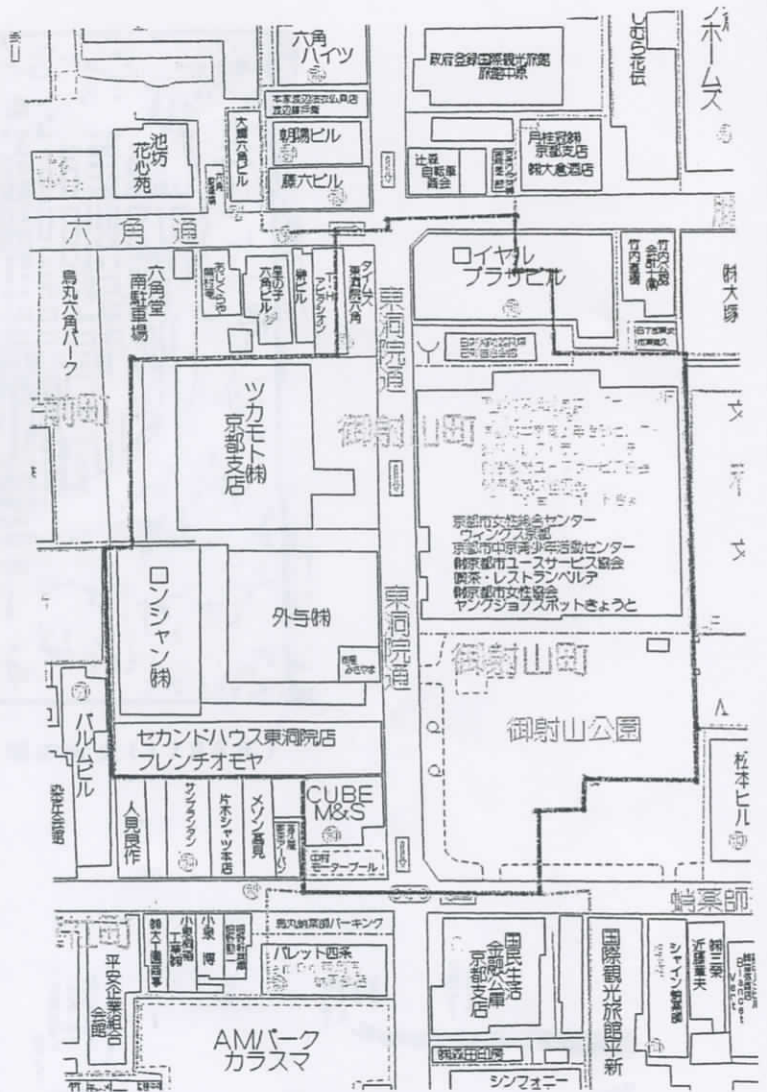


江戸時代の京都の名所記
「京雀」に載っている挿絵

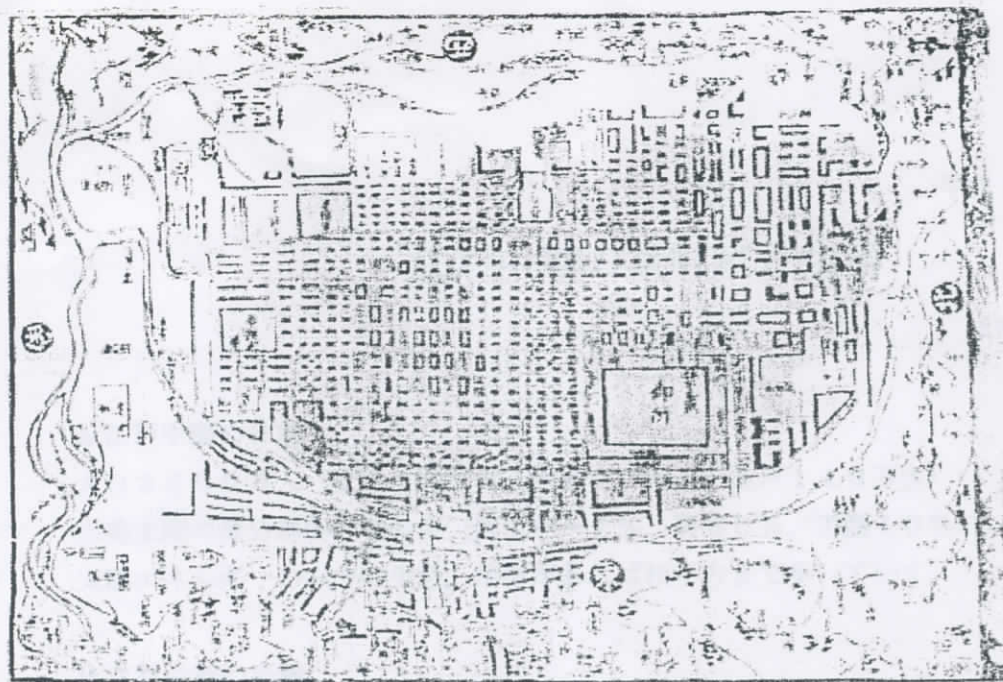
錦市場(1664年)



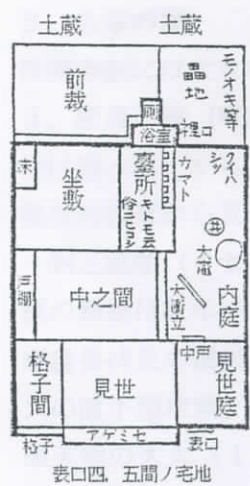
京都の四辻と共有施設の配置



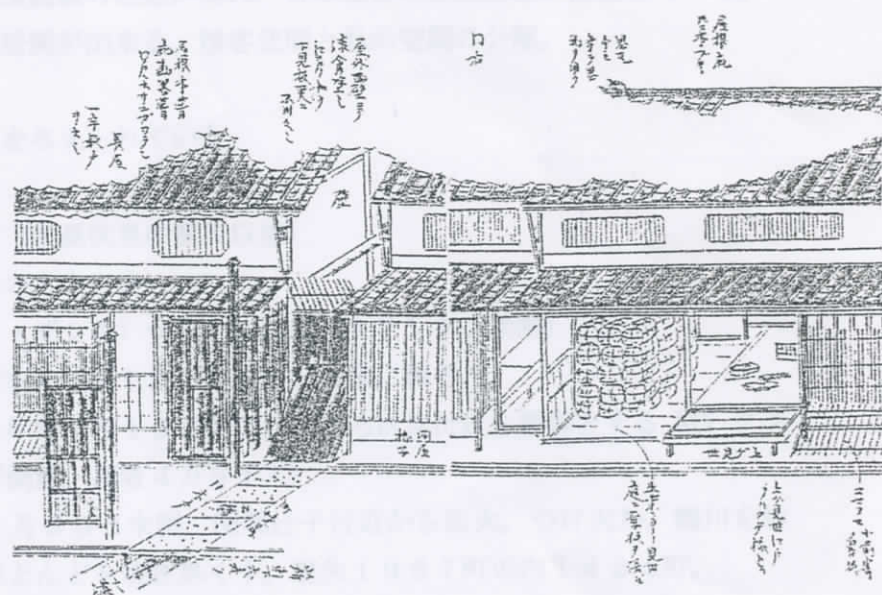
京都烏帽子屋町木戸之図



天明の大火(1788年)



京都の中戸町屋
(守貞漫稿より)



中戸町屋の外観(守貞漫稿より)